

楽しく豊かに読める子をめざして

— 基本的な事項の指導を通して —

鵜飼紀子

1. はじめに

「おべんきょう、いつやるの。」

「あのね。ぼくね……。」

きらきらと目を輝かせ、喜びと不安に満ちた一年生との生活が始まった。何でも吸収してやろうとするすばらしい意欲と、芽生えたばかりのみずみずしい感覚、鋭敏な目をつまむことなく、大事に育てていかなくはならないと強く感じた。

子供は、空想の世界にも難なく入り込んで遊ぶことができる。そんな世界へ連れていってくれるお話は、大好きなはずである。ところが、いつの間にか、子供たちの好きな教科から国語が外されてしまうのは、何故だろうか。

これまでの自分の授業を反省し、原因を考えてみた。
○教師側

- ・ 一教材にかける時間が長い。
- ・ 作品を細分化しすぎる。
- ・ 気持ちを追いすぎる。
- ・ 教師主導の授業になりがちである。
- ・ 指導内容が重点化されておらず、あれもこれもと欲張ってしまふ。

○子供側

- ・ 映像文化が氾濫し文章に親しんでいない。
- ・ 言語が乏しい。
- ・ 文意が理解できない。
- ・ 経験が乏しくイメージできない。
- ・ 漢字が読めない、書けない。

こう考えてみると、国語との出会いともいえる一年生は、大変

重要な時期である。子供たちの興味を持続させながら、しかも、文章への抵抗を少しでも取り除いてやる指導が必要である。

「読む」とは、まず、一語一文を大切にしながら、叙述に即して正しく読み取ることである。次に、イメージ豊かに読み取ることである。登場人物の気持ちや様子、場面の情景など行間を読み深めてこそ、「豊かに読む」といえる。しかも、文章や言葉を手がかりとしながら、想像力を働かせていく読みをめざす為には、その基礎となる言語の力を高め、一語一文を大切にして読み味わう力をつけていかななくてはならないと考えた。

2. 実態とねがう姿

(1) 実態 — 四月の様子から —

・絵本の読み聞かせをしても、興味を示さない子がいる。

本を読んでもらった経験が少ないこと、聞きとる力が弱いこと、集中力がないことなどがつかめた。

・登場人物の気持ちになって話すことが難しい。

「何をしていますか。」「何が見えましたか。」という発問には答えられるが、「何と言っているでしょう。」「どんなお話をしているでしょう。」といった問いかけに対しては、なかなか反応できなかった。正解のはっきりしたものには自信が持て

るが、登場人物と同化し、想像しながら自由に話すことには戸惑いが見られた。

・単語による話が多い。

発表する言葉も、日常の会話も、単語だけで話すことが多い。又、文がねじれていたり、助詞の使い方が間違っていたりしていても平気である。幼児音が残る子や、発音の不明瞭な子も二〜三人いる。

・ひらがなを読んだり、書いたりすることの差が大きい。

一つ一つのひらがなを読むことはできても、二字語、三字語になるとひろい読みしかできない子がいるかと思うと、長文でも、すらすらと読んでしまう子もいる。

書く方は、五十音全部が書けない子が七人おり、鏡文字になってしまったり、間違えて覚えていたり、筆順が間違っていたりして、正しく美しく書ける子は少ない。

正しく鉛筆が持てる子は三分の一程である。

四月の子供の様子から、指導すべき点が明らかにってきた。

(2) 願う子供の姿

・みんなの前ではっきりと読んだり話したりできる子

・書かれている内容が読みとれる子

・一語一文を大切にし、反応しながら読める子

- ・イメージ豊かな読みができる子
- ・興味を持ち、進んで学習することができる子

3. 指導の手だてと実践

(1) 入門期（一学期）に、言語を重点にした基本の指導をする。（略記）

- ① 学習姿勢をつくる。
（聞く、話す、書く、読む）
- ② 言語を中心とした指導内容を重点化する。

(2) 音読の習慣化を図る。

- ① 授業の中に音読を多くとり入れる。
- ② 家庭学習の習慣化を図る。
- ③ 本よみがんばり表を活用する。

(3) 楽しく豊かな授業を工夫する。

- ① 動作化をとり入れる。
- ② さし絵を利用する。
- ③ 一枚ノートの工夫をする。

4. 実践

(1) 入門期（一学期）に、言語を重点にした基本の指導をする。

① 学習姿勢をつくる。

ア、聞くことの指導

- ・話したい時は、手をあげて、名前を呼ばれてから話す。
- ・先生や友達の話は、おしまいまで聞く。
- ・話す人の顔を見ながら聞く。
- ・間違えても笑わない。

イ、話すことの指導

- ・「はい」「……です。」
 - ・黙って手をあげる。
- ウ、書くことの指導

・よい姿勢

・えんぴつの持ち方
エ、読むことの指導

- ・口を大きく動かしてはきはきと読む
- ・はさみ読み
- ・「、」や「。」も読む

② 言語を中心とした指導内容を重点化する。

ア、ことばのべんきょう

イ、通信による励まし

(2) 音読の習慣化を図る。

① 授業の中に音読を多くとり入れる。

② 家庭学習の習慣化を図る。

③ 本よみがんばり表を活用する。

(3) 楽しく豊かな授業を工夫する。

① 動作化をとり入れる。

情景や心情を頭の中で想像するだけでは、なかなか深く読みとれない。それで、動作化を一つの手だてとしてとり入れることにした。

ア、正しく意味をとらえるために

「しっぽのやくめ」の実践

くもざるは、しっぽでくだものをもぎとります。

くもざるは、しっぽを使ってくだものをとるということは、

すぐにわかったが、もぎとるの意味は理解されていなかった。

全員に手でもぎとるの動作をさせてみると、ひっぱっている

子が殆どで、中にはぎゅっと力を入れてくだものをつかんでいて、「それじゃつぶれてしまうよ。」と いうことになった。

ひとりだけ、「手をまわして、ねじってとるんやないの。」という子があつた。前でやらせてみると、見ていた子の中から、

「あつ、トマトをとったとき、そういうふうに行った。」と、経験と結びつけて話す子も出てきた。

みんなでもぎとるの動作のまねをして、意味を確認した。

この他にも

きつねは、きゅうにむきをかえるとき、しっぽをつよく
ふります。

うしは、しっぽで、あぶやはえをおいはらいます。

などで、動作化は、有効であった。

イ、人物の気持ちを読みとるために

「大きなかぶ」の実践（第三時）

◎本時の目標 たねまきの様子からかぶに対するおじいさんの願いと、大きくなるかぶの様子を読みとる。

授業記録より抜粋

T おじいさんは、何をしていますか。

- C たねをまいています。
- C かぶのたねをまいています。
- T どんな様子でまいていますか。
- C こしをまげています。
- C 指で穴をあけて一つずつまいている。
- C あさがおの時といっしょだね。
- C そう、そう。
- T おじいさんになって、やってみてくれますか。
- C (こしをかがめて、一つずつまく。)
- C 両方の手で、だいにまくんだよ。
- C (全員でやってみる。)
- T どんなことを言っているでしょう。
- C はやく大きくなってくれよ。みんなにたべさせてやりたいからね。
- C あまいあまい、大きな大きなかぶになってくれよ。ちやんと、せわをするからな。

おじいさんの様子を実際に動作で表してみることによって、おじいさんがいかにかぶのたねを大事に扱っているかがわかった。又、実際に自分たちが経験したあさがおのたねまきのこと

と結びつけ、同じように願いをこめてまいていることを読みとれた。

言葉だけでは言い尽くせないところを動作で補ったりしながら、このほかの場面でも、動作化を多くとり入れることにより楽しく読み進めることができた。

② さし絵を利用する。

「はなのみち」の実践

冬の間にくまさんが落としていったたねから、春になってきれいな花が咲いた場面である。

まず、冬の場面のさし絵と比べて変わったところを見つけ、季節が変化したことをとらえさせた。そして、それは、「あたたかいかげがふきはじめました」という文からわかることをおさえた。次に、花の咲いているところを、くまさんのうちから、りすさんのうちまでを指でずっとなぞらせた。これにより、「ながいながい はなのいっぽんみち」という言葉を実感を持ってとらえることができた。

「大きなかぶ」の実践

登場人物の気持ちを読みとる時、さし絵にふき出しをつけて、話したことを書くことにより想像をふくらませた。

どんな場面の様子なのかを話し合った後で、さし絵に自由にふ

き出しをつけた。

〈例〉

おじいさん「なかなかぬけんのう。」

むすめ 「それでも、いぬかねこをよんでくるから。」

おかあさん「そうか、たのんどいてよ。」

ふき出しの大きさを決めず、余白に自由な大きさに書いたので次々に書きこめ、楽しい活動となった。

③ 一枚ノートの工夫をする。

教材ごとに一枚ノートを作成し、より楽しくさらに主体的に取り組めるように、書く活動を一時間の授業の中に必ず取り入れようと考え、又、段階に応じたノートを作成した。

ア・重要語句や文を

視写する

- ・ はなのみち
- ・ しっぽのやくめ(説明文)
- ・ おおきなかぶ

イ・ふき出しを書く

- ・ おむすびころりん
- ・ じどう車くらべ(説明文)
- ・ くじらぐも
- ・ たぬきの糸車

ウ・書きこみをする

そして、このノートは、さし絵に色をぬったり、表紙に絵を描いたりして、教材ごとに一冊にまとめた。

ア、重要な語句や文を視写する。

「おおきなかぶ」の教材を、次の段階のノートとの橋渡しとした。この頃には、登場人物になって考えた気持ちも、文字で表すことができるようになってきた。

イ、ふき出しを書く。

「くじらぐも」の実践(第六時)

◎本時のめあて 楽しい空の旅の様子を想像することができる
何度目かのジャンプのあと、風に吹きとばされた子供たちは、くじらぐもの上ののっていた。今まで、地上と空とにいたものが一体となった場面である。ここでは、くじらぐもに乗った子供たちの楽しい空の旅の様子をイメージ豊かに読みとらせたいと思った。

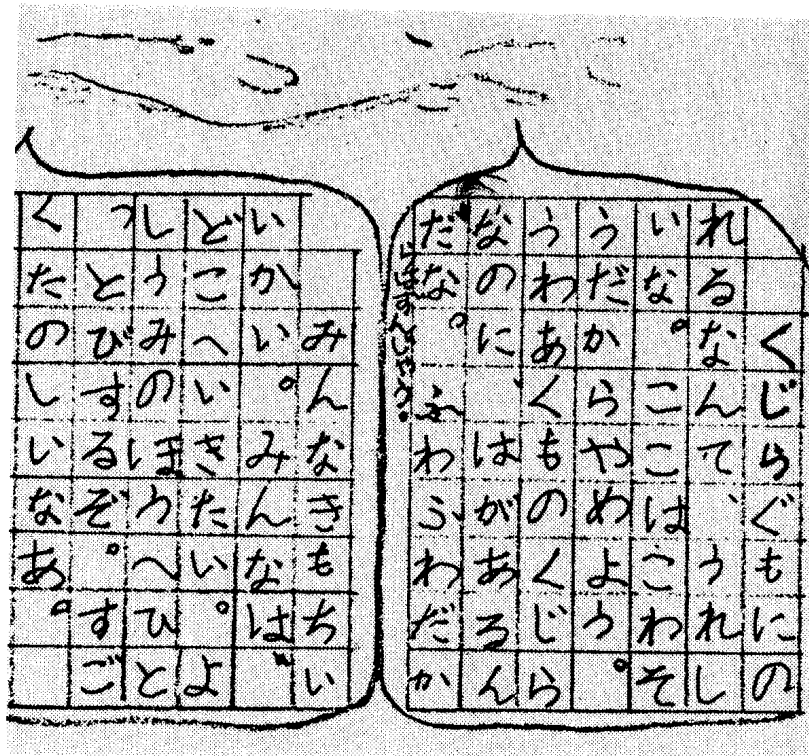
そこで、くじらぐもが、元気いっぱいに進んでいったことを押さえ、教師がくじらになり、子供たちとの会話遊びをした。さし絵の中のひとりになりきって、空の旅を十分に楽しんだ後で、子供たちの話したことや、くじらの話したことをノートに書いた。

〈例〉

○くじらぐもにのれるなんて、うれしいな。

ここはこわそうだからやめよう。

うわあ、くものくじらなのに、はがあるんだな。



ふわふわだから、はずんじゃう。
 ○みんな、きもちいいかい。
 みんなは、どこへいきたい。
 よし、うみのほうへひとつとびするぞ。
 すごくたのしいなあ。

全体の場で、この場面を動作化してから書いたことで、下位の子供も戸惑うことなく楽しい気持ちを書くことができた。ウ、書きこみをする。

「くじらぐも」では、音読とふき出し、動作化などを中心に読んでいったが、子供たちが、より主体的に、一語一文に反応しながら読む為に書きこみを始めた。「たぬきの糸車」は、「ようすを思いうかべて」がめあてであり、適した題材であった。

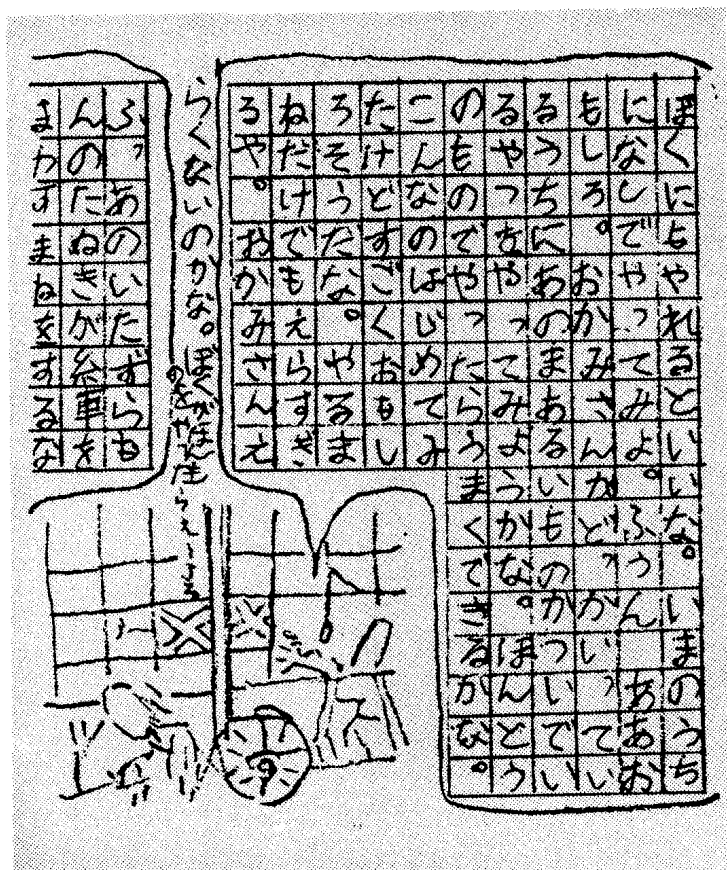
書きこむ内容は、次のようにした。

- ・目にうつったこと。
- ・聞こえたこと。
- ・どんな気持ちかわかったこと。
- ・思ったこと。

しかし、一体何を書いてよいのやらわからない子が殆どであるので、次の手順をふむことにした。

- ・教師と一緒に話をしながら書いていく。
- ・重要な言葉を教師がとり出し、その言葉について、ひとりで書く。

・自力で読みながら書きこんでいく。
 一緒に書きこんでいく段階で、「山おく」という言葉を話し合



た。

- 山おくって、まわりが山ばっかりのところ。
- 家があまりない。
- さびしい。
- しずかだ。
- 木や草ばっかりで何も無い。

• 夜は電気もなくてまっくら。

次々に出される意見に、「一つの言葉からこんなにたくさん書いていることまでわかるんだね」と、興味付けながら、一つ一つ書きこんでいった。

本文から離れないように注意しながら進めていくと、「ぼく、線を引く言葉を見つけた」と、だんだん慣れてきて、意欲も出てきた。

様子の把握が弱いと、ねらいからはずれてしまったり、読みが浅くなったりしがちであるので、こうした書きこみをもとに、十分に様子をイメージさせ、そして、ふき出しを書いていくようにしました。

5. まとめ

(1) 取り組みの成果

一年生の子供たちが、国語ぎらいにならないように、興味を持って学習ができ、しかも、確かな力をつけたいと願って実践を進めてきた。

入学当初からみれば、言葉の数もぐんと増え、自分の想像力を働かせて、言葉のイメージを広げていくことにも興味を示し、文章に立ち向かって読めるようになってきた。こうした力も、一つ

一つの学習の積み上げの成果であると思う。

その中でも、特に音読の練習が習慣化されたことによる成果は大きい。

家の人の協力が得られ、子供たちは意欲的に練習してこれた。文章に抵抗がなくなり、書かれている内容を読みとりやすくなったようだ。「もう、本を見なくても読めるよ。」と、暗誦してしまいう子も何人かでてきたり、「読みたい。」と積極的に手をあげる子が増えた。

こうして、音読に対して自信を持てたことで読みとりにも積極的に取り組めたのではないかと思う。

「はしれ、はしれ」で、なかなか人物の気持ちを表現できなかつた子が多かったが、登場人物の立場になって想像し、ふき出しに書けるようになってきた。

以前、想像することに重点をおきすぎて、文から離れてしまった読みになってしまったことであつたので、とにかく文章を大切にし、文にもどって考えさせるように心がけた。私自身が、何をいつ、どうねらうのか、どういう姿をめざすのかを、はっきりとさせて取り組めたことが、何よりの成果かもしれない。

(2) 今後の課題

学習姿勢は、すぐに身につくようなものではない。今後も、機

会をとらえ、指導を続けていかななくてはならない。何度も繰り返しながら定着させていこうと思っている。

書きこみの指導を、始めたばかりでまだまだ自力で読み進めることはできない。ひとり読みができるようになるように、読み取りの手がかりになるような重要な語句をみつけたり、言葉から、イメージ豊かに想像させたりする活動を少しずつとり入れていこうと考えている。

楽しく豊かに、しかも確かに読み深める為の指導の具体的かつ段階的な手だてを更に検討し、実践を進めていきたい。

△追記▽

筆者は昭和五十六年度本学卒業生。現在羽島市立正木学校教諭。

本稿は昭和六十二年度の羽島市学校教育実践記録に応募、提出したものの再録である。

全体の体裁やスペース、製版の都合で前半部分を大幅に省略した。また、貴重な実践の足跡を示す資料、児童の作品、児童の変容の過程を示す記録などを、資料として提供していただいたが、これも諸般の事情で割愛した。そのため筆者の意図や実践の歩みが十分伝わらないうらみがあるかと思われるが、お許しいただきたい。

△小瀬▽